



明
和
四

嘉
祿
婦
里

01
02
03
04
05

叙

夫俳之言也。比滑稽とは古人の解しぬれは今ありたにいはず。是れ此一篇を閲するに誠に工案の一助として不思議に三等の蓬萊城を築きよくも莊嚴せり。さすかの桃花仙もいま述べさるところ也。其趣意や伸るときは天地六合にわたり居む時は方寸の間に帰す。彼南花の篇共足るべしや。筆端の鼓舞になつむへからず。不老不死の薬なめたらん人こそ知り給ふ。

らめ 爰に綉葉のあのこ出とし父の七句に餘
りぬるか滑稽にゆたねて昼夜を捨すしてかつ
しかに行通ふに便りて此一帖を乞求て其親を
して先仙に至らしめんとす 孝と謂つし
あよく姑三等の蓮城に遊ひ得は松葉茯苓の
沙汰に及はず 真の地は仙に至らん事疑ひな
しと二六庵井阿述



蓬萊教訓

許六篇突集に云 亮句は曲輪の内より取て新

し事なれ、たま〜 残りたる物も隣家の春
と同じく題を案する時同じ曲輪なれば残りた
る物ひしと尋あたるとし 道筋かはらされは
疑ひなし 曲輪を飛出て案したる人は親は子
の案し所と遠ひ子は親の作意て各別ならんと
いへり しかるを去来難して曰 是は一片の
見解也 其一端を揚て初心に止めざる、物不
るし 曲輪の内外をしぬて論すべからず。



然水とも曲輪の内は少く外は多し 曲輪の外
を棄すといへとも同門の類句多し 二水教を
うくる道筋の同じきと遠ひ有ゆへ己 或人問
然水共曲輪の内にあたまた 殊りたる物をさか
さんより速に飛出て外をホむはしかしと去
東曰 吾子存^{左カ}思は、先さのこたく業しうる一
し 曲輪の外をさかして別に若存し 曲輪の
内に掟得ましき事は自後に思ひしう水なる
殊に惑偶即與する物は曲輪の内より存し末^{類カ}
句多し 先師先達の句を以考へしと云

爰に以曲輪の事は世に俳諧にころ立し人は知
りたるを今更溝の蛇我しう類につふやくへく
もあらねと築次根やけ面かのもに電解をむる
若草の人く道問ひかはせしかは痘には九つ
昼はセツのくわちかき眼鏡を霞せて記し戯水
ぬ
柳水曲輪といへるは詩歌連俳の凡流の一葉を
積築たして千里九重の天域にもあうす凡種
俳諧の蓬萊域是己 されは老を養ふ字は爰に
夜とまり日とまりの道を霞の一葉良茶湯豆腐

の寂を樂しむ。酒は二献に過ぎず。句ハ此にま
かせ月に六所の講席には東方期^期と招待して滑
稽の高論あり。彼初にも不礼とせし已れを早下
して人にほこらす私を尊とすとするにこそ百
練千鍛の誓古場にして誠に句の躰にも比喩せ
は春の祿ならん

山倉り尽して寒し初時雨 野道

常通ふ山路も遠しか人ニ鳥 南窓

山まゆの這ふて出たり春の雨 素丸

白萩や尋ぬる露の 露所 外阿

市女笠着て行人に踏菊哉 素丸
いとやけ城曲輪はすへて嚴重に懇懇を尽し其
其美を歎せは一字の費なく彼初にも詞の艶
を嫌ひ恋懐風姿おこそめに裁縫はぬ衣の不易
たりけらし 然は古人の章あまた秀逸ありて
今の世の恒例とはなりぬ 爰に三千年の尻を
尻て柴ちく勤勤むへきをや されとけ所は
初めよりなしかたくなり難しよて今の人はず
しと嫌ひぬるも或は柳に髪を結ひ梅と星とも
初柴の口ハ更にして不器の人作には古くも等

歎同業の出るも又あへたりし、しかれども能
 く丁嶮に氣交もこの曲輪を披しなは結すは昆
 山の玉よりも不易にして尊あつたり、夫をさ
 へあをさりに見過し塚垣を飛越して出人とす
 る人も多かりし古しといは、今日の朝飲も古
 から人にはいつ水の物を喰ふへきや、樹三千
 とせも住存せは又退屈といふ有保養といふあ
 りて修行の階子と一段下りて少し折ひりきた
 る場場にも道逢す一し是を内曲輪といふも
 いこやけ内曲輪は不死門を出て強向ひく、石

の及橋を渡れば仙居文士の標をつらね屋敷
 の桃橋松檜の森りり往來の人のすま返なく
 とこ、ろの暖かかにもつれはとけ言葉の初ら
 きも松別ならん、夏には古人の好去の句とて
 あまた有て一生を樂むへく百練を凝す一さ冥
 場たりき、鮎水はしはうく鳴くはの如小た子
 といへと流石に城の要害たれはとこに乍候の
 番所を構へあ小に下葉の高札有て大手先は至
 をも着せす、さ小と桶茶賣了命団子うる野郎
 有てしはうく其まつくつを崩せぬ自ら平歌俗

讀の和らきを得て自由の御まゝ出来ん不易
 にして全く吾の祿を遣はたりとやいはんか
 のこときは普通の論に按ずるに一ツの術地地カ
 有てたと一は城内に居して内曲輪へ出たりと
 しあたふたと鶴に乗て走り廻る一からす
 垣却名走り矢さまの透同より又えの城内を飛
 きさやし求む一し何れしうんさりおえお
 しはる物のけおぬえ為るなるし
 桃咲や空八幡の札の辻 野道
 桃足水は風も衣通し柳哉 素丸

10 20 相馬屋敷

寒食仙痛く南我は牛存らん 合
 蓑脱て圍炉裏へ寄と寒代 合
 白負や又行先も跨 鷗 合
 斯四方八面へ廻りて吹き散る事一千葉を思思
 ては夫より碧潭の底に歸と松陰芝罘田田經敷散
 らして瓢を考へ物を飛し盃ととつて霞を吸月
 柁をよさうり亀背に跨り花を詠め鳥をうさか
 に詞のほく水姿の優美出言ならん 廻向日新敷

け中七文字を同じ身存れけと 傍流おれも
 一事下して 時世執りお曲輪へ一是尋に吾
 船を考へ一し

句作りは御さ爰に自在を得て二千年の是^霜を
果むには都て六千^年の自在地に至る一きをや
いくはくの命を結め水ハ我も人も業し場の同
しき事也又出果るに目驚て又飛出んとす誠
や誓志の報階はさまく水は同じ[?]差気場を而
己腹せんも又なつみ有て折れしは玉子酒の了
まみにもおきないな人はより外曲^福といふ一
か、りん^々時世^を執を^久尽^とん^と又流世に位^を身
の業^みな^らず^や
いとやけ外曲^福は途に仙^城を降^て市^店高^家軒

10 20 相馬屋製

を^つら^ね繁^葉の^今や^うの^地也^さる^ハ是^を行^は
の^身と^して^羽織^白衣^に綱^代笠^杖を^投水^日龍^と
化^し紙^を鹿^也は^鶴と^成る^変化^懐り^の自^在な^か
ら^浮た^る業^は一^歩千^里の^踏た^か一^あらん^其
面白^みに^なつ^みけ^今や^うに^惚る^故に^こを^あれ
苗^裾の^薰り^胸帯^の史^りは^更に^右に^鯨鯨^のつ^る
し^切より^左に^鳥飼^の檜^木折^堆く^口に^も目^にも
事^か、^ねは^自然^と一^句の^旁り^出る^所又^いわ
す^や業^しき^に居^て淋^しみ^をわ^す水^す淋^しき^に
居^て業^しき^を忘^れす^とた^と一^け場^に媚^ひ遊^ぶ

と^もと 懐牛に松子ハ忘るへからされ思へは危き
所にして舟を練りそこなふ人も多かりき、
るは新しきにこゝろのときめくやへにそ
吹たひに霞降かと柳かあ
素丸
詞の新敷に迷ひ物の珠敷に轉せり小川の
にも三千年は遊子一し、
九千歳の遊藝を養ひ先後の柔しきは三場の
外も去一かす次 然るも仙人の志習ひは己か
才智の猿につなせられて三ツの曲輪の内も之尽

吹

氣

柳

猫

素丸

今

し言つくしたりと旁に給水て曲輪の外には
し了是を野といふなり、
いとやけ野は曲輪の外にして山川回野打ひら
け駅路の銘もそこに追く増て青橋の艶詞ハ孔
雀の啼りにひとしく農夫の鄙法用に使あり、
かしこに待乳の山^嵐凡さ、
涼ふ白麻青花は船よりあかる人玉廻あるお如
し 塗梅に家を新さけさせかくし哀の夕日目
はゆくも存りに五味縁肩にあげん 戸まよふは
すまや金く草の匂にし景懐もそ号まると呼

ひたしん するハ 此の 説く ありき 伴頭七
居ね 遊ひ 次乃の 言ひ 勝にし 一を 一息の 作
居ら くら 玉

解を やふと 一志 水草の花 程よ 素丸
望ん く と 唱り え 子 山 物 水 仙 花 合

今の 人 専ら け 跡に 遊ひ こと 以し くら ぬ みの くら ます
かの 舟と いか 馳 詞の 媚に 俗 耳を 驚かす といま
練舟の 法の 熟せ するに や ありん し あり 折節
は 又 け 場にし さま よ ひと 世の 人と 戯れん 七 仙
境の 自在 なる 一 け 木と 修行の ため には 夢 程も

10 20 相馬屋敷

利の ぬ 仙 葉を け け 一時の 息^音 術の 醉に 来し
け 面白みに 通力を け け あり 事 存 け け 然るに
又 宵の 元 たる 仙 ありん 是 近の 子 器く 合 さま ぬ
あ ぐ 古し たり 七 流 然と 仰 け 作の 句を 吐
いと かけ 作の 場ハ 三十 里七 四十 里七 行 過て 或
は 擬 暮を ち け け 或は 龍に 誠 する あり 誠 け 其 術
は 手 裏 小 刀 細 工に 一 七 天下の 人 驚 け け ありん と
す

紅梅に 油 継 け け 夜の 雨 素丸
拾て 行 年 け け 左 葉 下 岩 俵 合

さ小と一條はとて真す小ととも其儘作る事早
く飽すはやし世年とまたさるに世上に作の尽
果たるは正途にあらず小ハ天の憐みにやあらず
人仙すう猶其術の尽るあり況や人情の人力存
るをわと夜もすめう書集むるに薰風さつと吹
落白雲新にかゝり雲中に聲あうと善哉／＼と
かし素堂陽士のいへる事あり 蘊向を求る乎
は單寄の引出しを披すに等し。 日く夜く
披し出し尽したるも又二三日纏て披し之は
何所との端とこそこの隅に何かしらす足あらず物

1020 相馬屋敷

存小と此金言おすにわする一からすとこの妙
聲を聞初く夢の覚たるかこと一幸に鏡葉のぬ
したらちおの七そり呼せり折めら存小ハ天小
り又葉存小はとて送るしりし侍り忽
終はみなる地うすし梅の露

かつしり主人

素丸書子

明治四亥其三月

ハハ表

菟の群れたる 英一嬢の画あり

祝

老父 七十の寿も得侍る事への
よろこびしくお木のわらう猶水せり
とねゆお

一日巻

永き日や 東方朔を杖の友

綺葉

歎 歎

七十にして心の欲する所に
したかたといふもきり居の便
遊戯を弄くの時

落そへむこゝろの終に朱の種

素丸

鶴に乗日はいつくそ春月

夢太

長生の介芽 萱げん菊の巻し

宗瑞

長生の傳授にすゑやる午鳥

班象

一日巻の正文の年号と開て

七曲の糸と月安し 老の春

竹阿

合

としの雲の巻かへりり 毒の花

畔嵐

以下
後抄

春之部

春風の音るが東や今秋の梅

春風

春雨や蘭一葉火はも之りあり

宗瑞

涼沈む身を啼くさす霞の赤

也布

つれづれと咲きぬ梅の花

麻又

駒上はやあに路中の柳の影

八亀

お空降は何とあろうと朧月

文素

跡のあいの人のこゝろやまきの聲

桃崎

いろ／＼の花を釣る也才柳の赤

麦根

夜之部

盃に七世や組人て柗の主

楚若

玉に杖もとより花さうと才小可

謙也

あやの小とけ人うん 柗の藤

探翠

左

七色八色さくら葉越す春の松

嵐亭

卯杖のう習ひ初め 才さいたつま

六高

東川 綾葉高丸 節道、白芥南庵 縁文、節道、秋松の

亭仙あり、此口毛子高 東川の 養気の 辯の 一文あり

行る、も瘵るものなり郭公

なにと身すしの、りすみや郭公

未の物は水一筋やあんに鳥

子起啼えにあいはなありけり

森の鶉の泣をううやふみあふ

松一葉落ちて地にたつ曇かな

秋之部

久秋や青海花かいかく浪の船

名月や山の影色出朱上り

名月や川津の里の人面

加三はあすの嘆神ありてろくや

一本にて埒明くたぬくく行葉哉

冬の部

春の花中紀す木に今嘆たが

寄る波の一夜とまがや初氷

解とやうや氷とやうやと海風哉

日せをふや硯に寒き鳥の月

折るけう景あさしたの火針かふ

春の部

新柳や香は朝夕の日にこけ小

夢太

素園

既白

兼丸

半時房

風律

枕山

如是流

市河

素凡

思露

白芥

哥川

素凡

石柳

野老

武然

すねありの一集録葉仙士の急ぐ所己あ
 る人予に問て曰 此集すねありと題す可
 何の謂え 答て言すすねありとハ崎陽の俗
 法に 彼地におりて 浮懐の少年の夜遊
 の廊に入て 縦横に足を上す飛行自在のこと
 きを名付ていふ也、今無事庵の危符は数年
 仙仙窟に遊ひ坐臥に情を尽し 換骨移化せむ
 事をあもあ 修験の遊之 是は修行なりと
 異といふとも 業は相似たり 誠にはいふ可
 兼成のすねありとといふなりと云ふ可

巨富数人講堂後

あ

葛師仙書目録

文刻巻初板

菽くくひす	馬光抄 全	芭蕉林	馬光抄 全
菽訓玉首	馬光抄 全	古今意	馬光抄 全
愚智同春	馬光抄 全	馬光抄 全	馬光抄 全
嘉祿御史	馬光抄 全	馬光抄 全	馬光抄 全
新編御史	馬光抄 全	馬光抄 全	馬光抄 全
太夫新説	馬光抄 全	馬光抄 全	馬光抄 全
仙仙録	馬光抄 全	馬光抄 全	馬光抄 全

其好之也
也刻

中
姓
名
姓
名
丁
他
序
之
丁
路
一
丁

書
林
江
戶
東
山
亭
日
西
村
海
之
板

